人口問題研究（J. of Population Problems）80－4（2024. 12）pp. 413～423

特　　集　Ⅰ

第28回厚生政策セミナー「時間と少子化」（2023年12月４日）

【趣旨説明】

少子社会における「時間」をめぐる困難を考える

岩　澤　美　帆*

・**司会**：　本日のテーマの趣旨について，『少子社会における「時間」をめぐる困難を考える』と題しまして，国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長，岩澤美帆よりご説明申し上げます．

・**岩澤氏**：　それでは本セミナーの趣旨説明をお話しさせていただきます．

1.　本セミナーのねらい

なぜ今回「時間」に着目したのかということですが，時間は明解でどなたにとっても当たり前のものです．しかし，こうした当たり前に，しばしば無意識の思い込みというものが潜み，それが社会の変化を妨げているということがよくあります．そこで我々の時間の使い方，時間感覚を見つめ直し，少子化との関わりを皆さんと一緒に探ってみたい，ということがこのセミナーの目的です．以下では時間に関連して４つのキーワード－「時間は文化」「生活の時計化」「加速と圧縮」「RHOL」－を用いてお話しします．

2.　４つのキーワードから考える時間をめぐる困難

(1)　時間は文化

最初のキーワードは「時間は文化」です．我々が知っている時間は本当に当たり前なのでしょうか．それを考えるために，今や古典といって良い，社会学者見田宗介が真木悠介名で著した「時間の比較社会学」（真木

* 国立社会保障・人口問題研究所

1981）という本を紹介したいと思います．この本は原始共同体から現代まで，時間意識の概念を比較したものですが，人類史上いかに多様な時間感覚・概念があったかと驚かされます．過去・現在・未来が同時に存在するという考え方や，牛の世話を軸に時が刻まれるという社会もありました．我々にとっては当たり前の「分」や「秒」という意識．それがいかに特殊なことなのかと考えさせられます．真木は近代を「時計化された生の全社会的な浸透」と表現します．こうしてみると，我々の今日の時間感覚も文化の一つであり，国や時代によって異なるのも当然です．そして変えられる，変えた方が良い時間感覚もあるのかもしれません．

(2)　生活の時計化

続いてのキーワードは「生活の時計化」です．生活の時計化，つまりいろいろなことがスケジュール化され，時間通りに進むということは大変効率的で社会を大きく進歩させます．実はこうした時計化が日本で進んだのは，おそらく戦後だと考えられます．1955年，当時の鳩山首相の肝いりで「新生活運動」という社会運動が展開されました（新生活運動協会 1955）．実は当時中学生だった私の父もうっすら覚えているという話です．資料によると，各都道府県がそれぞれの目標を掲げ，多くの県で「時間の励行」，つまり時間を守りましょう，計画通りに物事を進めましょう，という目標が掲げられていました（図１）．

奈良県では，時間にルーズな慣習を「大和時間」と呼ぶとのことですが，それを追放すると書かれています．これらは，それまでの日本には時間をあまり守らない，計画を気にしない文化があったことを示唆します．そしてこの新生活運動に本土復帰前の沖縄県は入っていないわけです．その後の出産をめぐる沖縄県の特徴，すなわち出生力が格段に高い状況を考えますと，大変興味深い事実だと思います．

一方で，こうした世界的に進んだ時間による支配に不安を感じる人たちも出てきます．こうした不安は小説や児童書などでも語られます．有名なサン＝テグジュペリ（1943）の「星の王子様」では，星ばかり数え続け，幸せそうに見えないビジネスマンの物語が出てきます．また，ドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデ（1973）の「モモ」は，人に時間を節約させて盗む泥棒が，やはり人を不幸にする物語です．そして21世紀に入ると時間の物語も変わってきます．2011年の「TIME／タイム」という SF 映画がありますが，遺伝子操作により報酬が時間で支払われる未来の世界が舞台で，時間が尽きて亡くなってしまう貧困層と，100年以上の時間を持て余す富裕層という，時間による格差が描かれていました．考えてみますと20世紀の物語は，ある意味，中間層の物語だったわけですが，現代は時間が足りないというだけではなく，そこに格差が描かれているというのが興味深いと思います．そして実際に現代人，特に日本人が時間に悩んでいるということを，内閣府が実施した日・仏・ドイツ・スウェーデンの国際比較調査（内閣府子ども・子育て本部 2021）の結果からお示ししたいと思います．

秋田県	お互いに時間を守りましょう
	むだを省きましょう
	住みよい環境を創りましょう
	記録をとりましょう
福島県	団体目標の一つとしては生活の合理化が取り上げられ、婦人団体においては時間の励行が確実に守られている。
栃木県	衣食住生活の改善
	環境衛生の改善
	家族計画
	迷信因習の打破
	冠婚葬祭の改善
	家庭経済の合理化
	生活時間の合理化
	家族関係の民主化
	経営の合理化
	貯蓄の励行
埼玉県	結婚の簡素化
	時間の励行
	虚礼の廃止
	カとハエをなくす運動
神奈川県	冠婚葬祭の簡素化
	政治意識の高揚
	貯蓄奨励
	時間の励行
三重県	冠婚葬祭の簡素化
	カやハエのいない生活の実現
	有害な映画、出版物の排除
	時間の励行
兵庫県	衣食住の改善
	生活の共同化
	保健衛生の向上
	家庭の民主化
	因習の打破と慣習の合理化
	生活時間の合理化
	レクリエーションの振興
奈良県	大和時間の追放
	（奈良県では時間を励行しないことを大和時間といっている）
	冠婚葬祭の簡素化
和歌山県	冠婚葬祭の改善
	貯蓄の励行
	衣食住の工夫と改善
	保健衛生の向上
	助けあいの実践
	時間の励行
山口県	国旗掲揚
	親切の励行
	時間の励行
	結婚の改善
	ラジオ体操の励行
香川県	冠婚葬祭の改善
	時間の励行
	保健衛生の向上
	衣食住の工夫と改善
	台所の電化と改善
	迷信打破
	助けあい運動
	貯蓄の奨励
高知県	時間の励行
	冠婚葬祭の改善
	台所の改善
	蠅、蚊、のみ、ねずみの撲滅
	迷信の打破
長崎県	人格の尊重
	勤労意欲の向上
	創造的精神の発揮
	郷土愛の涵養
	公共物愛護の徹底
	貯蓄の増強
	生活の計画化
	衣食住の改善
	環境衛生の徹底
	緑化運動の推進
大分県	衣生活の改善合理化
	食生活の改善合理化
	住生活の改善合理化
	生活の共同化
	営農改善と生活改善との結びつき
	保健衛生の向上
	家族計画の実施
	家族関係の近代化
	家庭関係の近代化
	家庭経済の計画化
	因習迷信の打破、慣習の合理化
	生活時間の合理化
	健全娯楽の振興

図１　新生活運動の実践項目に時間の使い方に関わるものが含まれていた県

資料：新生活運動協会（1955）
注：下線が時間の使い方に関する実践項目.

これから比較する４か国の出生率を示してみますと，フランス，スウェーデンでは比較的高く，そこにドイツが続き，日本が一番低くなっています（図２）．では日本はどのようなところが諸外国と違うのか，結果を見てみましょう．

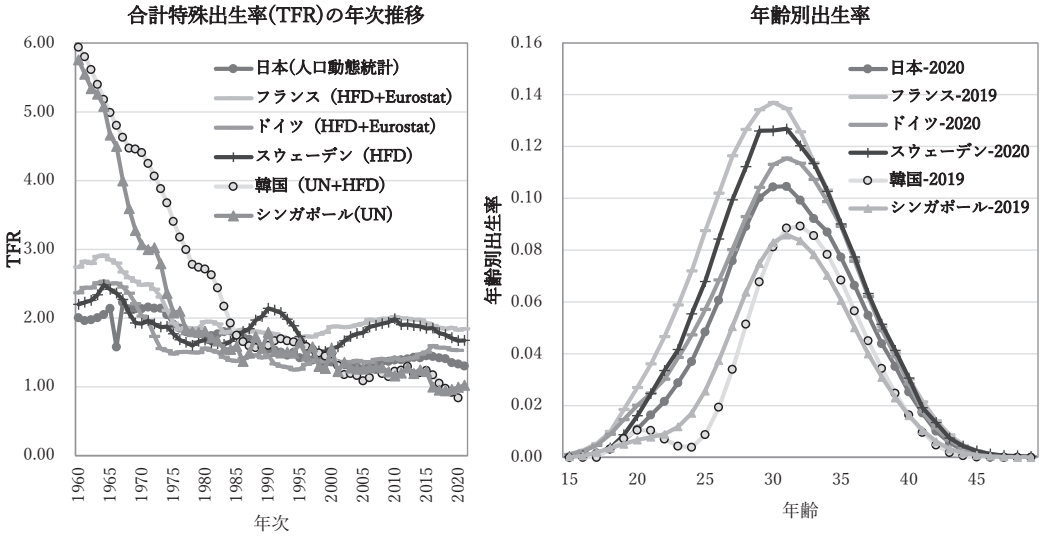

図２　各国の合計特殊出生率（左）と年齢別出生率（右）

資料：厚生労働省「人口動態統計」, Eurostat “Eurostat Database”, Max Planck Institute for Demographic Research (Germany) and Vienna Institute of Demography (Austria) “Human Fertility Database”

私自身，このようなところに違いがあるのかと驚いた結果がこちらです.「あなたが、子育てをしていて、自分にとって負担に思うことはどんなことですか」と尋ねると，もちろん子育ての出費が負担だと答える人は少なくないのですが，特に日本で顕著なのが「自分の自由な時間が持てない」という回答でした（図３）.

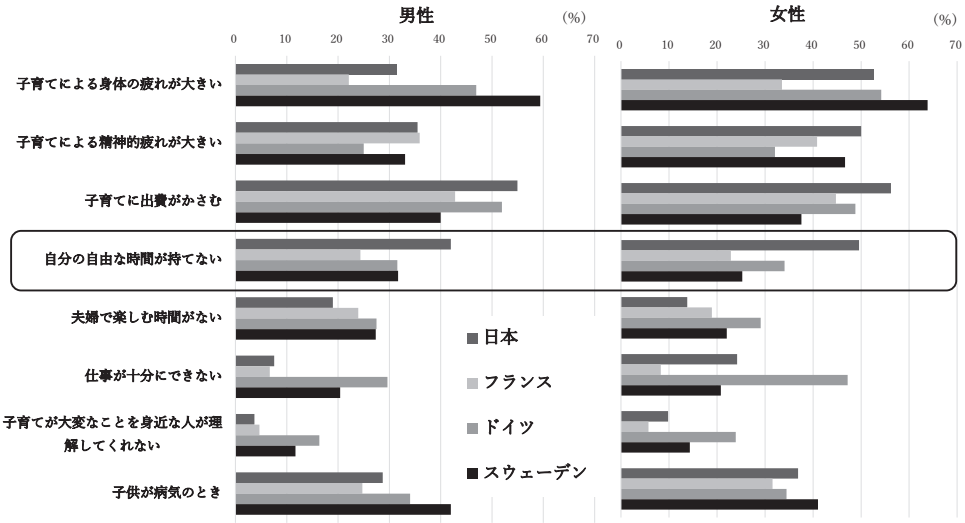

図３　設問「あなたが、子育てをしていて、自分にとって負担に思うことはどんなことですか。」の回答

資料：「少子化社会に関する国際意識調査」（内閣府子ども・子育て本部，2021）
注：20～49歳，問15

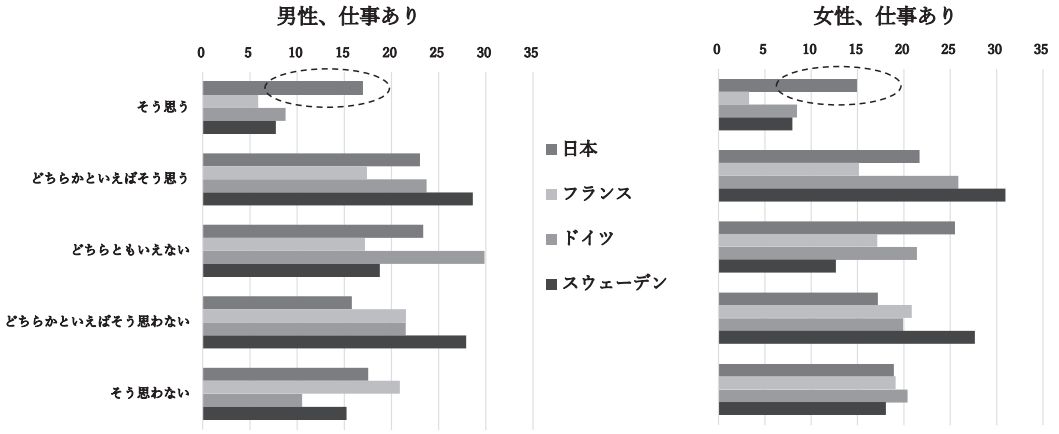

図４　設問「仕事に充てる時間が長すぎるために、家事や育児を果たすことが難しくなっている」の回答

資料：「少子化社会に関する国際意識調査」（内閣府子ども・子育て本部，2021）
注：20～49歳，問28（設問「この１年間を振り返って、あなたはご自分の仕事と家庭生活のバランスについてどのように感じていますか。あなたのお気持ちに当てはまるものを選んでください。」）

この自由な時間がないという回答は，正規雇用の女性の場合さらに日本で高くなっていました．その他，日本の男女は，希望では家庭・個人を優先したいが，現実には仕事を優先してしまうと答えています．それから「仕事に充てる時間が長すぎるために、家事や育児を果たすことが難しくなっている」と断言する人が日本で顕著に多いということもわかりました．このように日本人は希望に反して就労時間が長く，その結果家事や家族に時間がかけられず，特に働く女性では自分の時間が持てないと感じていることが意識調査からわかりました（図４）．これらについて実際の生活時間のデータで見るとどうなっているのか，それを解消する方策はあるのかなど，これからのご報告を聞いてみたいと思います．

(3)　加速と圧縮

実はこうした身近な生活の問題は，マクロの社会変化とも関わっていそうです．続いてのキーワードは「加速と圧縮」です．人口問題に詳しい人は「加速」という言葉を聞いてピンとくるかもしれません．近代化と共に起きた人口転換は人口高齢化を引き起こすのですが，その高齢化のスピードが後発の国ほど速いのです．例えばフランスやスウェーデンは高齢者の割合が１割から２割に増えるまでに70年以上かかりました．しかしドイツは55年，日本は20年で達成しました．奇しくも先ほどの出生力の順位と同じです．さらに東アジアの韓国では17年，シンガポールでは10年と早まってきます．このような急激な人口構造の変化は急激な社会変化を引き起こします．韓国では古い価値観と新しい価値観が混在し，両者が衝突していると言われています．これを韓国の社会学者のチャン・キョンスプは「圧縮された近代」と呼び（Chang 2010, 2022），韓国の超少子化を説明する重要な理論と考えられています．

そしてもう一つ近年注目されている社会理論をご紹介します．ドイツの社会学者のハルトムート・ローザが「社会の加速」の理論化を試みています（Rosa 2005）．ローザによると，近代化が進むにあたって技術・社会変化・生活テンポのそれぞれの次元で加速が起きるとのことです．加速とは時間あたりの行動・経験の増加で，皆さんの中にも最近動画は倍速で見ているという方がいるかもしれません．また，オンライン視聴の方は移動時間を節約して次の予定を入れているかもしれません．そしてこれらの加速は相互に影響して，より複雑な社会を生み出すというのです．これにより人々は中長期の予測や判断というものが困難になり，標準的な生き方のようなものが失われていきます．そしてこうした状況になると，人々は「重要な機会を逃すかもしれない。ならば選択肢をより多く持っていなければならない」と，焦燥感に駆られる．ローザはこのように説明します．

このような分析は，子どもに苛烈な教育投資を行う東アジアの特徴に，新たな解釈を与えるかもしれません．つまり，単に子どもに知識をつけてほしいというのではなく，子どもがチャンスを逃してはならない，そのためにはより多くの選択肢を与えなければならないという思いが，教育投資に向かっている可能性があるのです．つまり「将来が不安だから選択肢を増やす」というプレッシャーがなくならない限り，役立ちそうなものに際限なくコストをかけてしまうという流れが変わらないかもしれません．

先ほど出生率のグラフに，より加速が著しい韓国とシンガポールを追加してみました（図２）．こうした国では極めて低い出生率が観察されます．ちなみにローザは，加速は止めるべき，と主張したりスローライフを提唱しているわけではありません．むしろ残念ながら脱加速は不可能だと語ります．それを前提に我々は考えていくしかないようなのです．

(4)　RHOL

最後のキーワードは「RHOL」です．はじめに人口学のものの見方を紹介します．一般に社会科学において「時代」や「時点」は重要な視点ですが，人口学はさらに年齢という側面を重視していて，時点と年齢で作られた平面，その上でものを考える学問です．誕生から死亡までを結んだ斜めに伸びる直線は生命線と呼ばれ，直線の長さで寿命を表します（図５）．

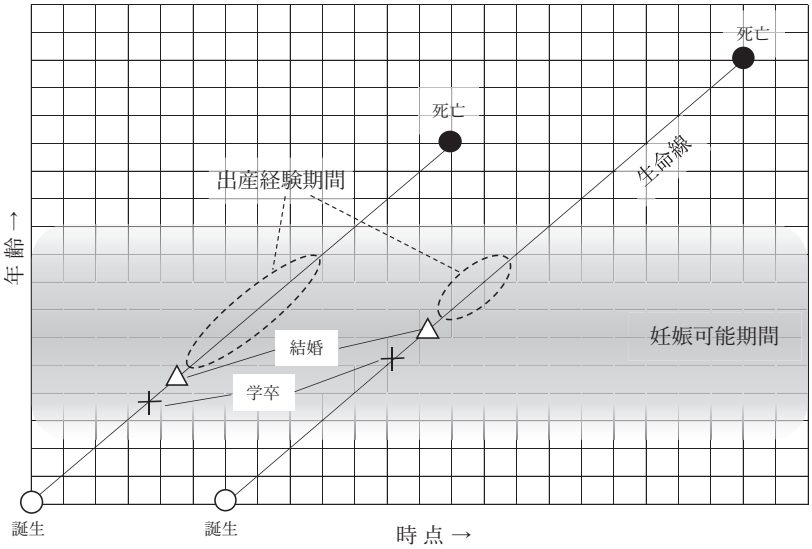

図５　人口学における観察眼と出産経験期間の短縮化

注：時点軸と年齢軸で示した生命線の模式図

近年寿命が延びているのですが，女性が子どもを産める年齢は，ある程度決まっています．高学歴化や晩婚化により，子どもを産む期間は従来よりもかなり短縮化されているわけです．

こちらのグラフは子どもを３人産んだ女性が１子，２子，３子を何歳の時に産んだかを年齢分布を重ねて示したものです（図６）．山の高いところが標準的だと考えれば，27歳から34歳までの７年間で３人の子どもを産むのが主流だと分かります．27歳から34歳といえば，仕事の面でもキャリア形成においても重要な時期です．このように20代，30代は男性にとっても女性にとっても仕事と家庭生活を軌道に乗せる重要な時期で，この短期間で極めて難しい舵取りを迫られています．この時期を英語圏ではしばしば「Rush Hour of Life（人生のラッシュアワー）」と表現します．これが４つ目のキーワード，「RHOL」です．

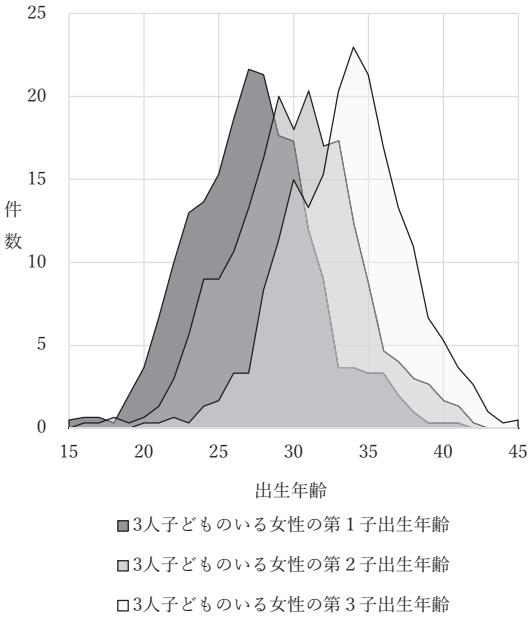

図６　子どもを３人もった女性の第１子～第３子出生年齢

資料：「第16回出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所 2023）による集計.
注：45～49歳初婚どうし夫婦の妻，202名，３歳移動平均.

2000年代に入ると，女性の活躍が進む高所得社会では，女性の biological clock，生体時計と，この RHOL が強く意識されるようになりました．いくつかのビジネス書を挙げてみますが，2002年のヒューレットの「Creating a life（命を創る）」（Hewlett 2002）はキャリア女性に向け，出産をどう追求するかを説いた本で，大変売れたようです．書評には「これを読んでいれば、先輩世代の出産をめぐる悪夢は避けられてだろう」と書かれています．2009年には，ビリティオリによる「What every woman should know about fertility and biological clock (すべての女性が知っておくべき妊孕力と自身の生体時計のこと)」（Birrittieri 2009）という本が出て，こちらも話題になりました．「女性は自分が今“何時”なのかを知りなさい」というメッセージが書かれています．そして日本でも2012年に NHK が「卵子老化の衝撃」という番組を放映して話題になりました（NHK 取材班編著 2013）．しかし，社会の状況が異なると情報の受け止められ方も変わります．米国は少子化ではないので，女性による自身の問題と

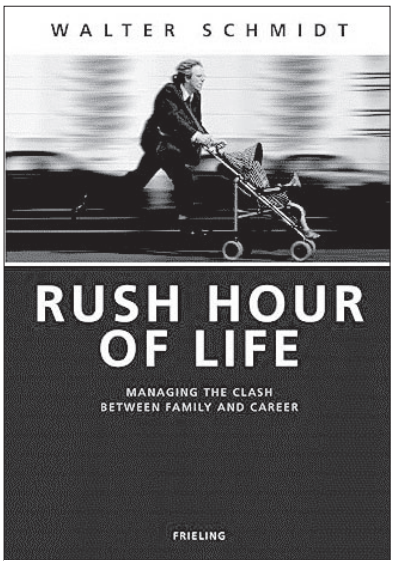

図７　『人生のラッシュアワー：家族とキャリアの衝突を乗り越える』（Schmidt 2017）の表紙

受け止められたのですが，日本では少子化と絡めて女性の加齢が論じられたことで「エイジズム」だという批判的な受け止めもありました．そしてまた海外に話を戻しますが，この2012年にはシュミットによる「Rush Hour of Life」という本が出ており，興味深い写真が表紙にあります（Schmidt 2017）（図７）．お父さんがベビーカーを猛スピードで押しています．近年，日本でもお父さんが朝，お子さんを自転車に乗せて走っている，という情景を見かけるようになりました．この本が出された時期になりますと，これまでの本は女性にのみ焦点が当てられていましたが，男性も女性もどうやってこの人生のラッシュアワーを乗り越えるかということが指南されています．

こうした事情を背景にして，次のような調査結果が出ています．「「将来、自分が子供を持つか持たないのか」といった観点からの人生設計（ライフプラン）について、あなたはどの程度考えたことがありますか。」という問いに対し，日本では「あまり考えたことがない」という人が圧倒的に多いということがわかりました（図８）．

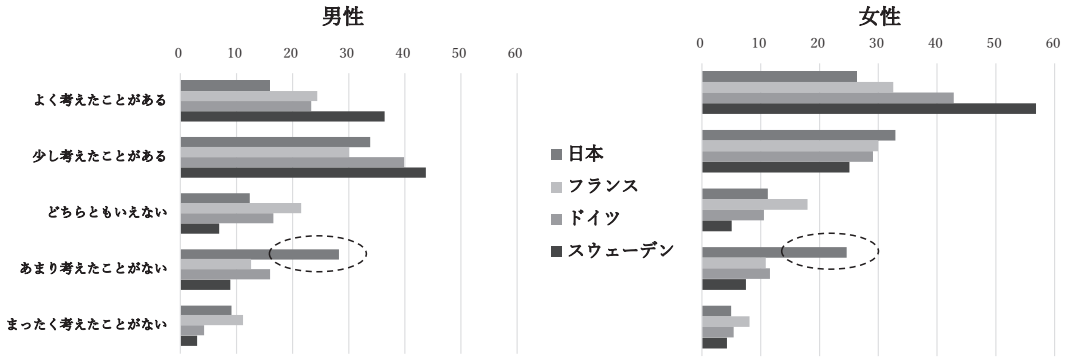

図８　設問「「将来、自分が子供を持つのか持たないのか」といった観点からの人生設計（ライフプラン）について、あなたはどの程度考えたことがありますか」の回答

資料：「少子化社会に関する国際意識調査」（内閣府子ども・子育て本部，2021）
注：20～49歳，問12

図９は2021年に社人研が実施した「第16回出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所 2023）のデータを集計したものです．左の円グラフは子どもを産み終わった夫婦に，結婚当時は何人の子どもが欲しかったかと尋ねたものです．「２人」と答える夫婦が最も多いわけですが，「特に考えていなかった」という夫婦も３分の１を占めています．この結婚時に予定した子ども数別に，実際には何人の子どもを持ったのかを示したのが右の棒グラフです．結婚時の平均予定子ども数は2.08人でしたが，最終的に持った実績は1.84人にとどまります．さらに子どもを何人持つか「特に考えてなかった」夫婦では1.77人とさらに少なめです．結果的に，予定していた子ども数を達成できた夫婦は７割にとどまっていることが分かりました．出産可能期間が圧縮しているにもかかわらず，それをうまく認識できず時間切れを迎えている夫婦が少なくないように見受けられます．

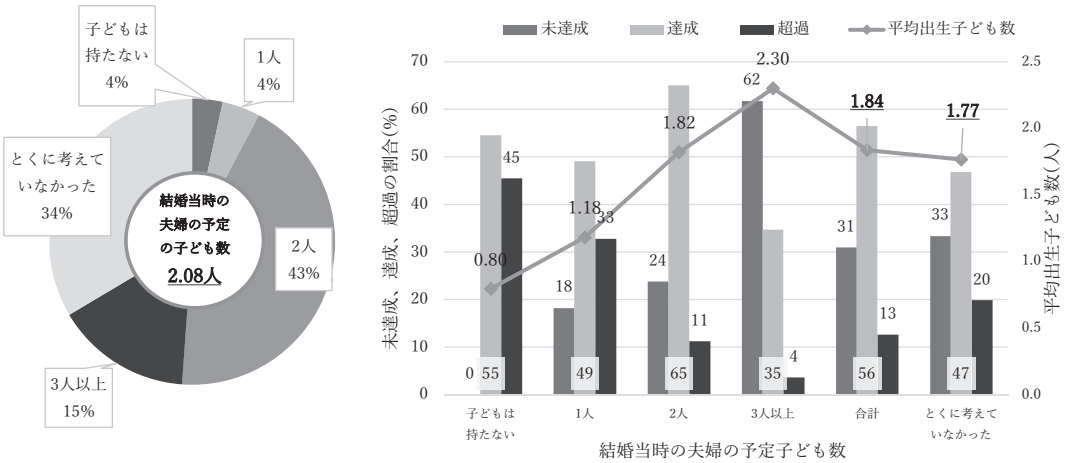

図 9　結婚時の予定子ども数（左）と予定子ども数別達成状況（右）

資料：「第16回出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所 2023）による集計.
注：妻の年齢が45～49歳の初婚どうし夫婦，1,279組.「とくに考えていなかった」は「予定 2 人」として達成分布を算出．合計では除外.

3.　まとめ

では最後に趣旨説明をまとめます．我々が当たり前と考えている時間感覚は，その社会が文化として受け入れているもので，変わることがあり，変えられることがあるのではないかということです．データで示された日本の特徴は，子育ての時間，自分の時間が持てない，人生のラッシュアワーがあまり意識されず予定した子ども数が達成できていないというものでした．残念ながら社会の加速は今後も進むことが予想されます．そこで，日本における人生のラッシュアワーの現状がどうなっているのか，それを乗り越えるためには，どのような考え方が必要で，どのようなサポートが必要なのかということを考えながら，以下のご報告をお聞きいただければと思います．それではご登壇の皆様，よろしくお願い致します．これで岩澤からの趣旨説明を終わります.

謝辞

第28回厚生政策セミナーの企画，開催準備および当日の運営は，人口動向研究部および業務係を中心とした総務課が行った．研究部では人口動向研究部の守泉理恵室長，釜野さおり室長（当時），余田翔平室長，吉田航研究員，企画部の横山真紀研究員，国際関係部の竹内麻貴室長が担当した．また，報告の逐語録のとりまとめは釜野さおり室長，余田翔平室長，宮井健志室長が担当した．使用した「出生動向基本調査」の個票データは，国立社会保障・人口問題研究所調査研究プロジェクト「出生動向基本調査プロジェクト」のもとで，統計法第32条に基づく二次利用申請により使用の承認（令和 6 年 6 月27日）を得たものである．資料作成にあたり守泉理恵室長の協力を得た.

参考文献

Birrittieri, Cara (2009) *What Every Woman Should Know About Fertility and Her Biological Clock*, New Page Books.

Chang, Kyung-Sup (2010) *South Korea under Compressed Modernity: Familial Political Economy in Transition*, Routledge.

Chang, Kyung-Sup (2022) *The Logic of Compressed Modernity*, John Wiley & Sons.

Hewlett, Sylvia (2002) *Creating a Life: Professional Women and the Quest For Children*, Miramax.

Rosa, Hartmut (2005) *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag (ハルトムート・ローザ著，出口剛司監訳 (2022)『加速する社会：近代における時間構造の変容』福村出版)

Schmidt,Walter (2017) *Rush Hour of Life: Managing the Clash between Family and Career*, Frieling-Verlag Berlin.

NHK 取材班編著（2013）『産みたいのに産めない　卵子老化の衝撃』文藝春秋.

国立社会保障・人口問題研究所（2023）『現代日本の結婚と出産－第16回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書』.

サン=テグジュペリ著（1943），内藤濯訳（1953）『星の王子さま』岩波書店.

新生活運動協会（1955）『もりあがる新生活運動－新生活運動全国協議会から―』新生活運動協会資料－二.

「TIME／タイム(In Time)」（映画）（2011）.

内閣府子ども・子育て本部（2021）『少子化社会に関する国際意識調査報告書（令和 2 年度）』.

真木悠介（1981）『時間の比較社会学』岩波書店.

ミヒャエル・エンデ著（1973），大島かおり訳（1976）『モモ』岩波書店.